

完全に仕事を捨てるのではなく、人生の中心としての強調点を仕事からレジャーへ変える人もいる。ある真面目なロッククライマーは、彼のスポーツの浮き浮きさせる自己鍛錬を人生のほかの部分のための訓練として、こう表現する。「もしこれらの戦いに十分に勝てたなら、その自分自身との戦いは……世界中の戦いに勝つことが容易になるでしょう」。そしてまた別の、大工になるために山に移住したビジネスマンはこう言う。

私は会社での人生でたくさんのお金を稼いだものですが、ある日、自分がそれを楽しんでいないことに気づいたのです。人生をやりがいのあるものにする体験を、私はもっていませんでした。職場で自分の時間のほとんどを過ごし、優先順位が混乱していることに気づきました。……気づかないうちに何年も過ぎていました。私は大工でいることを楽しんでいません。静かで美しい場所に住んで、ほとんど毎晩山登りをします。私自身のくつろぎと、私がそばにいることは、私がおもてやることのできない物質的なものよりも、家族にとっては意味のあるものになるだろうと思います。

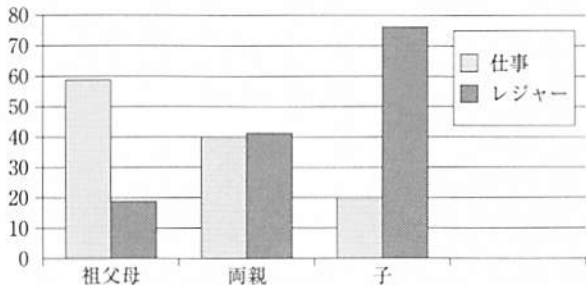
ビジネスマンから大工への転職は、創造的な再調整の一種の例である。それを人生に持ち込むことのできる人は、できるだけ多くのフローを人生に構築できるようにする生産的努力の対象を見つ

けるまで探し求める。ほかの選択肢はより満足のいかないものになる。それは、仕事中毒になるか、一日中レジャーに逃げることで、多くのものを見失うことになる。しかし、ほとんどの人は、人生を退屈な仕事とありふれたレジャーに区分けすることに甘んじている。ミラノ大学のアントネラ・アレ・ファーヴェとファウスト・マシミーニによるアルプスのコミュニティの研究で、どのようにフロアが仕事からしみ出てレジャーにしみ込むかについての面白い例が見られる。彼らはポント・トレンタツス——住人は車やテレビをもっているが、今も牛を飼ったり、果樹園を世話したり、木作業をしたりして伝統的な仕事をしている、人里離れた山にある村——の大家族の四六人のメンバーにインタビューした。心理学者たちは村の三世代に、いつ、どのように生活の中でフロアを体験するかについて述べてくれるよう頼んだ(図2)。

最も年長の世代は最も頻繁にフロア体験を報告し、その大部分は仕事に関わっていた。たとえば牧草地で草を刈ったり、家畜小屋を修繕したり、パンを焼いたり、牛の乳を搾ったり、庭で働いたりする時である。真ん中の世代は——四〇歳から六〇歳までを含んでいる——仕事からもレジャー活動——たとえば映画を見たり、休暇をとったり、本を読んだり、スキーをしたりといった——からも同じ程度のフロアを報告した。最も若い世代である孫たちは、祖父母とは逆のパターンを示した。つまり、フロアが起こるのは最も少なく、しかもそのほとんどはレジャーから発生していた。ダンス、自動車レース、テレビを見ることは楽しみの最も頻繁な手段の一部である(図2ではそれぞれ

図2

イタリア、グレッソニー谷、ポント・トレンタッスの三世代家族 (N=46) におけるフロア活動の配分



(出典：Delle Fave and Massimini 1988 より改変)

れのグループがどれくらいの量のフロアを報告したかを示していない。仕事かレジャーで報告されたフロアのパーセンテージを示しているだけである。

ポント・トレンタッス村の世代的な差異のすべてが社会的変化によるわけではない。そのうちのいくらかは、どの世代も通過する通常の発達パターンである。つまり、若い人々はいつも、より人工的な危険と刺激からの楽しみに依存的である。しかし、これらの通常の違いが社会的、経済的な移行が進みつつあるコミュニティで拡大されることは、ほとんど確実である。このような場合、年長の世代では依然として伝統的な生産的仕事に意義あるチャレンジを見出す、一方、その子どもや孫は、今日的な意義をもたない雑用と見なすものにますます退屈し、心理的エンтроピーを避ける手段としてエンターテインメントに向かうのである。

アメリカでは、アーミッシュやメノナイトのような伝

統的コミュニティでは、仕事とフロアが切り離されないようにすることができた。彼らの農耕生活の毎日の日課では、いつ仕事が終わればレジャーが始まるのかわかりにくい。織物、大工仕事、歌、読書のような大部分の「自由時間」活動は、物質的、社会的、精神的意味においても、役に立ち生産的でもある。もちろんこの達成は、琥珀の中に保存されたままであることの代価だった。いわば、今では古風になった科学的・精神的発達段階に引き留められているのである。これが、喜びに満ちて生産的でもある生活の規範を守るための唯一の道なのだろうか。それとも、発展的变化を続けながら、これらの特質を組み合わせるライフスタイルを再考することは可能なのだろうか。

自由時間を一番うまく使うためには、仕事に対するのと同じくらい、工夫と注意をつぎ込む必要がある。人の成長を助ける積極的レジジャーは簡単にはやっこない。過去のレジジャーは人々にスキルを発達させる機会と体験を与えたので、正当化された。実際、科学と芸術が専門職業化される以前は、膨大な科学研究、詩作、絵画の制作、音楽の作曲が個人の自由時間に行われた。グレゴール・メンデルは有名な遺伝の実験を趣味として行った。ベンジャミン・フランクリンは仕事の一環ではなく興味によって、レンズを磨いたり、避雷針で実験することに時間を費やした。エミリー・ディキンソンは自分自身の人生に秩序を創造するために超一流の詩を書いた。今日では、専門家だけがこのような話題に関心があることになっていて、アマチュアは、専門家のために残されている分野へあえて踏み入るとばかにされる。しかしアマチュア——好きだからする人——は、自分自身

はもちろん、すべての人の人生に楽しみと興味を付け加える。

レジャーの創造的な使い方を作り出せるのは非凡な人だけではない。すべての民俗芸術——それぞれの文化にその特有のアイデンティティと名声を与える歌、織物、詩や彫刻——は、仕事や生活維持のための雑用から残された自由時間に、一般の人々が一番のスキルを表現しようと努力した結果である。もし、われわれの祖先が自由時間の中に美と知識を探る機会を見出すのではなく、自由時間を単に受身的レジャーに使っていたとしたら、世界がどれほど退屈になっていたかは想像の域を超える。

一般に、われわれが使っている電気、ガソリン、紙、金属製品などの再生不可能なエネルギーのうち七パーセントは、もっぱらレジャーのために使われている。ゴルフ場を建設し水をまくこと、雑誌を印刷すること、リゾート旅行のために飛行機を飛ばすこと、テレビ番組を制作し配信すること、地球上の資源のかなりの量を使うパワーボートや雪上スクーターをつくり、燃料を供給することなどである。皮肉なことに、レジャーからどれくらい幸福や楽しみを得られるかということと、それをしている間に消費される原料のエネルギー量とは、まったく関係ないようであり、もしあるとしても、ネガティブな関係である。自分の側のスキル、知識、感情の投資を必要とする穏やかな活動は、心理的エネルギーの代わりにたくさん装備と外部のエネルギーを使いこめる活動と同じくらいやりがいがある。良質な会話、ガーデニング、詩を読むこと、病院でボランティア活動をする

こと、何か新しいことを学ぶことは、ほとんど資源を使わないし、少なくとも、一〇倍もの資源を消費することと同じくらい楽しい。

個人の人生のすばらしさが、かなりの割合で自由時間がどう使われるかによるのと同じように、社会の質も、その構成員がレジャー時間に何をするか次第である。郊外のコミュニティは、気が滅入るほど刺激が少ない可能性がある。というのはエメラルド色の芝生に建っているみごとな建物の中では、誰も興味深いことは何もしていないだろうと思うのがもつともだからである。社会のエリート層のメンバーと言葉を交わすだけで、その地域には金銭や家族、ファッション、休暇、ゴシップのほかにも、興味を惹くものはほとんどないのだという印象を受ける地域がある。一方で世界には今もなお、名高い詩人に魅了されて古代の本を図書館に収集している退職した専門家や、楽器を演奏したり自分たちの村の物語を書いたり、祖先の一番優れた創作物を次から次へと保存したりしている農民のいる地域もある。

どの場合にも、個人レベルと同じように社会レベルでも、レジャーの習慣は結果としても原因としても働くということを見てきた。社会グループのライフスタイルが時代遅れになる時、仕事が退屈な日常になり、コミュニティの責任が意味を失う時、レジャーは徐々に、より重要になりそうである。そしてもし社会がエンターテインメントに依存しすぎになったら、必然的に起こる技術的、経済的問題に創造的に対処するために残された心理的エネルギーは、少なくなっているだろう。

アメリカでエンターテインメント産業が非常に成功している時に、それについて警告を発するのは、へそ曲がりのように思われるかもしれない。音楽、映画、ファッション、そしてテレビは世界中からドルを運び入れる。ビデオ店は事実上すべての区画に、失業者を減らしながら急激に広がる。子どもたちはメディアの有名人たちを、その人生に近づくべきモデルとして見る。そしてわれわれの意識は運動選手や映画スターの行動についての情報でいっぱいになる。これらすべての成功が有害になるなどと、どうしていえるのだろうか。もし、ただ経済に重点を置いた見地からだけ流行の価値を評価するなら、何も悪いことはない。しかしもし受身的エンターテインメントにふけっている世代の長期的影響も考えるならば、バラ色の絵はまったく恐ろしいものになるだろう。

自由がないので意義のない仕事と、目的がないので意義のないレジャーに人生を分極化させる危険を避けるためには、どうすればよいだろうか。一つの可能な出口は、先の章で論じた創造的な人々の例によって示されている。伝統的な社会に暮らす人々にとってと同じように、創造的な人々の人生では仕事と遊びは不可分のものである。しかし伝統的な社会に暮らす人々とは違って、創造的な人々は凍りついた時間の中に縮こまったりしなかった。彼らは未来に存在するよりよい道を見出すために、過去と現在から最良の知識を用いる。彼らから学べるのは、自由時間を極度に恐れる理由はもはやまったくなくということである。仕事それ自体はレジャーと同じくらい楽しめるものになるし、仕事から休憩したいと思えば、レジャーは精神をほんやりさせるための計画ではなく、

ほんとうのレクリエーションになるだろう。

もし仕事の手が施しようがなかったら、ほかの解決法は、自由時間を少なくともフロアのため
の——自己と環境の潜在能力を探るための——ほんとうの機会に確実にすることである。幸運にも、
世界は確かに、やってみるべき面白いことではいっぱいである。ただ、想像力の欠如かエネルギーの
欠如だけが立ちはだかっている。もしそうでなければ、われわれは皆、詩人か音楽家、発明家か冒
険家、アマチュア学者か科学者か芸術家か収集家になれただろう。

第6章

人間関係と生活の質

生活の中で最もよい気分と最も悪い気分の原因になるものは何かと考えた時、ほかの人たちのことを考えるかもしれない。恋人や配偶者はすばらしく元気にさせてくれるが、また、いらいらさせたり落ち込ませたりもする。子どもたちは恵みでもあり苦痛でもある。上司の言葉は一日をよくも悪くもする。われわれがふつうの状況で行うすべてのことの中で、他者との交流は最も予測のつかないものである。ある瞬間にはそれはフローで、次には無気力、不安、くつろぎ、退屈になる。交流が精神にもたらす力を利用して、臨床医は心理療法のやり方を発展させてきた。それは他者との好ましい出会いを最大に増やすことにかかっている。幸福が人間関係に深く調子を合わせ、意識が他者から受け取るフィードバックに共鳴することは疑いない。

たとえば、経験抽出法で調査した人々のうちの一人であるサラは、土曜日の朝九時一〇分にキッチンに一人で座って、朝食をとり新聞を読んでいた。ポケットベルがシグナルを発した時、1は悲しい、7は大変幸福という尺度で、彼女は自分の幸福度を5に位置づけた。一一時三〇分に次のシグナルが着信した時、彼女は依然として一人で、タバコを吸っていて、息子が別の都市へ遠く離れていこうとしているという考えで悲しんでいた。ここで幸福度は3に落ちた。午後一時に、サラは一人でリビングルームに掃除機をかけていたが、幸福度は1に落ちた。午後二時三〇分には彼女は裏庭にいて、孫たちと泳いでいた。ここで幸福度は完全な7になった。しかし一時間も経たないうちに、日光浴をし、本を読もうとしたのに孫たちが彼女に水をはね散らしていた時、幸福度は再び

2へ下がった。「嫁がもつと悪ガキたちの面倒をみるべきだ」と彼女はE S M調査票に記入した。一日のうちでほかの人について考えることや、ほかの人と交流することは、われわれの気分絶え間なく伴奏をかなでる。

ほとんどの社会では、工業化された西洋の社会に比べて、人々は非常に多くを社会的文脈に依存する。個人は自分の潜在能力を自由に発展させられるように放任されるべきであるということわれわれは信じている。そして少なくともルソー以来、社会を個人の達成にとつて思い通りにならぬ障害として考えるようになった。対照的に、とくにアジアの伝統的な見方では、個人は他者との交流を通して形づくられ洗練されるまでは、何者でもないのである。これがどのようなものかについての最も明瞭な例の一つが、インドにある。正統派のヒンドゥー文化は、幼児期から老年期まで、そのメンバーが行動の適切な理想にかなうことを確実にしようとして非常に苦労してきた。「ヒンドゥー教徒は一連の集団的なイベントの間に、意識的かつ故意に生み出される。これらのイベントはサンスカラ、つまりヒンドゥー教徒の人生において基本的かつ強制的なライフサイクル儀式である」とリン・ハートは記した。サンスカラは人生の連続する各段階のために、新しい指導のルールを与えることによって、子どもや大人の人間形成を助けるのである。

インドの精神分析医サディール・カカーが半分ふざけて書いたように、サンスカラは正しい時

の正しい儀式〔right riteとゆう洒落〕なのである。

一連のステージで人間のライフサイクルは展開し、各ステージには特有の「仕事」と、そのステージを通してのきちんとした発達のために必要なものがあるのとらえることが、伝統的なインドの考え方の確立された部分である。……これらの儀式の主な目的の一つは、子どもを社会に漸進的に統合することである。つまりサンスカラでもって、原初的な母と子の共生から引き離して、コミュニティの完全に自立した一員へと子どもを導く慎重な動きに拍子をとるのである。

しかし、社会化は行動を形づくるだけでなく、意識を文化の期待と願いにびったり合わせさせる。そのため他人に失敗を見られると恥を感じ、他人を失望させたと思うと罪悪感を感じるのである。ここでもまた、自己がどれくらい深く、内在化されたコミュニティの期待によって決まるかという点について、文化間で非常に大きな違いがある。たとえば日本語には依存、義務、責任のすばらしい微妙な違いを言い表す言葉がいくつもあるが、それを英語に訳すのは難しい。なぜならわれわれの社会環境では、そのような感情を同じだけ体験することにはならなかったからである。日本では、洞察の鋭い日本人ジャーナリスト笠信太郎（りゅう、のぶ）によると、典型的な人は「他人が行くところにはどこ

でも行きたがり、海に泳ぎに行く時でさえ、空いている場所を避け、芋を洗うように混んでいる場所を選ぶ。

なぜわれわれが精神的にも肉体的にも、それほど社会環境に巻き込まれるのかを理解することは難しくはない。ヒトの近縁種であるアフリカのジャングルやサバンナに住んでいるサルでさえ、グループに受け入れられなければ長くは生きられないということを学んだ。孤立したヒヒはすぐにヒョウやハイエナの餌食になった。われわれの祖先はずっと昔に、自分たちは社会的動物で、防御のためだけでなく生活の快適さを学ぶためにもまた、グループに依存しているのだということを理解した。ギリシャ語の「[diol]」〔馬鹿〕は、もともとは一人きりで暮らす人を意味した。つまり、コミュニケーションの交流から切り離されているような人は精神的に無能であることが当然とされていたのである。現代の書き言葉をもっていない社会では、この知識が非常に深くしみ込んでいて、一人であるのを好む人は魔女に違いないと思われている。ふつうの人は強制されないかぎり人との交わりをやめようとしなからである。

交流は意識のバランスを保つのに非常に重要なので、それがわれわれにどのような影響を与えるかを理解すること、また、それらをネガティブな体験ではなくポジティブな体験に変える方法を学ぶことは重要である。ほかのすべてと同様に、人間関係はただでは楽しめない。その利益を得るためには、ある程度の心理的エネルギーを費やさなければならぬ。もしそうしなければ、われわれ

は、地獄は他人だと結論したサルトルの「出口なし」の登場人物の立場に身を置く危険を冒すことになる。

心理的エントロピーではなく意識の秩序へ導く人間関係は、少なくとも二つの条件を満たしていなければならない。第一は、自分の目標と他者または他者たちの目標との間に、いくらかの調和の可能性があることである。交流のそれぞれの参加者は、自分の利己心を追求するに違いないので、これはおおむねいつでも難しい。それにもかかわらず、ほとんどの状況で、探してみれば、少なくとも共有された目標の断片は見つけられるのである。充実した交流のための第二の条件は、ほかの人の目標に喜んで注意を注ぐことである。心理的エネルギーがわれわれの所有する最も必要不可欠で希少な資源であることを考えると、これは簡単な仕事ではない。これらの条件が整った時、他者と一緒にいることから最も価値のある結果を得ることが可能になる。それは、最も望ましい交流から生まれるフローを体験することである。

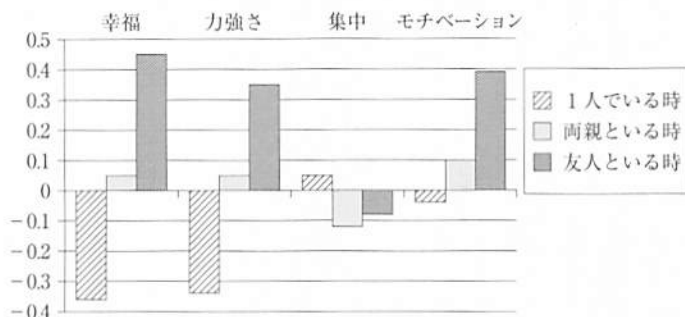
人々が報告する最もポジティブな体験は、ふつう、友人と一緒にいる体験である。これはとくに若者に当てはまる(図3)が、人生の後期においても当てはまる。人々は概して、友人と一緒にいると、何をしているかに関係なく、より幸福でモチベーションがある。勉強や家事の雑用でさえ、それらは一人ですか家族とすると気分を落ち込ませるのだが、友人と一緒にするとポジティブな体

験になる。なぜそのようになるかは簡単にわかる。友人と一緒にいると、最も望ましい交流のため
の条件が、ふつう、最大になるのである。われわれは、その人たちの目標が自分のものと矛盾せず、
関係が平等なので、その人たちを友人に選ぶ。友情には、搾取につながるかもしれない外部からの
強制なしに、相互に利益を与えることを期待できる。理想的には友情は静的なものではない。つま
り、常に新しい感情的・知的刺激を提供するので、関係は退屈や無気力に薄れていかないのである。
われわれは新しいことや、活動、冒険に挑戦し、新しい姿勢や、考え、価値観を發展させる。また、
もっと深く親密に友人を知るようになる。多くのフロア活動は、チャレンジがすぐに消えてしまう
ので短期間にだけ楽しい一方、友人は感情的・知的スキルを磨きながら、一生の間、潜在的に無限
の刺激を提供するのである。

もちろん、この理想は頻繁に達成されるというわけではない。成長を促進する代わりに、友情は
しばしば、自己イメージを変化させることなく保護する安全な繭を提供する。ティーンエイジャー
の仲間集団の表面的な親睦、郊外のクラブ、コーヒー茶話会、専門的な団体、飲み仲間は、努力や
成長を求めることなく同じような精神性の人々の一員であるという心安まる感覚を与える。このこ
とを示すものは図3に見られる。一人でいるよりも友人と一緒にいる方が、集中力はふつう、顕著
に低くなっている。見たところ、典型的な友人との交流では、精神的な努力はめったに伴わない。
最悪の場合、ほかの親密な結びつきをもたない人は、感情的サポートを求めてほかの根なし草の

図3

さまざまな社会的文脈でティーンエイジャーの体験の質はどのように変化するか



この図の「0」は1週間を通して報告された平均的な体験の質を指す。幸福と力強さの感情は1人でいると顕著に低くなり、友人といると高くなる。モチベーションは友人といると顕著に高くなる。同様の傾向は、大人でもティーンエイジャーでも、アメリカでも外国でも、すべてのESM研究で見られる。

(出典：Csikszentmihalyi and Larson 1984)

ような人にもつばら依存するようになり、友情は破壊的になる。都会のギャング、社会規範から外れたグループ、テロリストの組織はふつう、彼ら自身の失敗によってか環境によってか、どんなコミュニティにも適した場所を見つけられず、アイデンティティを確かにするためだけにお互いがいるという人々によって成り立っている。このようなケースでもまた、関係の結果として成長が起こるが、大多数を見ると、それはきわめて有害な成長である。

社会環境のほかの主な特徴と比較すると、友情は今現在において最も感情的に報われる関係であり、また長期的に潜在能力を展させるための最も大きな機会でもある。現代の生活は、しかしながら、友情を維持

するのにふさわしいものとはいえない。もっと伝統的な社会では、一生を通して子ども時代の友人と連絡を取り続ける。アメリカの地理的、社会的流動性はこれをほとんど不可能にした。高校の友人は小学校の友人と同じ人ではないし、大学での友人はもう一度混ぜ直される。一つの仕事からほかの仕事に移る時、一つの都市からほかの都市へ移る時、そして年をとると、一時的な友情はさらに表面的になる。ほんとうの友人がいないことは、しばしば、人生の後半期に感情的危機に直面した人々の主な不満となる。

不平のもう一つの原因は、満足できる性的関係の欠如である。二〇世紀の文化的達成の一つは、よい人生のための「よいセックス」の重要性の再発見だった。しかしながら、ふつう、振り子はあまりに遠くに揺れてしまった。というのは、性的関心はほかの体験の文脈から外されてきたのである。そして人々は、セックスを自由にできることで幸福になれるという間違った概念を受け入れてきた。性的な出会いの多様性と頻度は、それらが埋め込まれている関係の深さと激しさよりも優先されてきた。進化論によるアプローチでは、性的関係の原初的な目的は、子どもを作り、親となるカップルを結びつけることだったと確証されるので、この論点に関して、教会の伝統的な教えが大衆の現代的な信念よりも科学的立場に近いということは皮肉である。もちろんこれは、これらの機能がセックスの唯一の目的でなければならぬということを意味するのではない。たとえば、味蕾の適応機能は食べ物腐っていないかどうかを見分けることだったが、時が経つと味蕾の

繊細なニュアンスに基づいて複雑な料理法を發展させた。そのためまた、性的な喜びの原初的な理由がなんであろうと、人生を豊かにするための新しい可能性を生み出すために用いることがいつでもできるのである。しかし、ちょうど飢えと関係のない大食が不自然なように、親密さ、思いやり、約束といったほかの人間の欲求から切り離されたセックスに狂うことは、同様に異常なことである。

本能の解放の大胆な先駆者が、社会の抑圧への解決策として自由なセックスを呼び掛けた時、半世紀後にはセックスが体臭防止剤やソフトドリンクを売るために使われるだろうという可能性について、彼らはよく考えなかつた。ヘルベルト・マルクーゼ（哲学者）たちが悲しそうに記したように、性愛ははずれ搾取されるに違ひなかつた。そのエネルギーは非常に強かつたので、教会や国家の権力、そうでない場合は広告産業によって取り込まれた。過去においては、性的関心は抑圧されていたので、それに惹きつけられる心理的エネルギーは生産的な目標に向けられることができた。今では性的関心は奨励されているので、人々は性的な達成の幻想を与える消費に心理的エネルギーを向ける。どちらの場合にも、最も深く親密な人生の喜びの一部になることのできたはずの力は、外部からの支配力によって圧倒され、操作された。

われわれは何ができるだろうか。人生のほかの面を見てもわかるように、重要なのは自分のために決めることであり、何が危なくなっているか、われわれの性的関心を勝手な目的のためにコントロールしようとしている支配力はなんなのかを理解することである。それは、われわれがこの点で

いかに傷つきやすいかを理解する助けとなる。それは至る所に存在する状況であり、たとえばアメリカ側のロッキー山脈では、コヨーテは時に、何も疑っていない農場の雄犬をコヨーテの群れが待ち伏せしている場所へ誘い出すために、発情期の雌を送り込むそうである。自分たちの傷つきやすさを理解すると、反対に極端に危険を感じ、セックスについてわけもなく恐れるようになる。禁欲主義も乱交も、必ずしもわれわれのためにはならない。重要なのは、自分がどのように生活を管理したいと思うか、そしてその中で性的関係にどのような役割を演じてほしいと思うかである。

友人をもつのが難しいことへの部分的な埋め合わせとして、アメリカでは新しい可能性が発見された。それは、両親や配偶者、子どもたちと友人になることである。ヨーロッパの洗練された愛の伝統では、配偶者との友情は「夫婦の愛と」矛盾するものだと考えられた。結婚が主に経済か政治同盟に貢献するものであり、また子どもたちが両親に相続と地位のために頼っていた頃、友情を可能にする平等と相互関係の状況は欠けていた。しかし、ここ二、三代では、家族は経済的必需品としての役割のほとんどを失ってきた。そして、物質的な利益のために家族に依存することが少なくなればなるほど、感情的報酬のためにその潜在能力を楽しむことができるのである。このようにして現代の家族は、いろいろな問題を抱えながらも、前の時代では手に入れるのがもつとずっと難しかった、最適経験のための新しい可能性を開いている。

少なくともヴィクトリア時代からわれわれが心に抱いてきた家族のイメージは、多くの可能な選択肢の中の一つでしかなかったことが、この二、三〇年で理解されてきた。歴史家ル・ロワラデュリによると、中世の後期、フランスの田舎では、同じ屋根の下に暮らし、同じ釜の飯を食べるすべての人から家族が成り立っていたという。これは実際に血縁のある人々を含んでいたかもしれないが、また農場の仕事を手伝ったり、宿を与えてもらったりするために迷い込んだ働き手やその他の人々も含んでいたかもしれない。見たところ、これらの人々の間にはどんな分け隔てもなかった。血縁関係があろうとなかろうと、彼らは同じ神の家、つまり石とモルタルでできた家に所属しているように見え、それは生物学的家族よりもほんとうに重要な関係のある構成単位だった。千年前、ローマの家族は非常に変わった社会的取り決めだった。そこでは、もし子どもが気に入らなかつたら、家父長は子どもを殺す法的権利をもっていた。そして生物学的血統は、一九世紀の貴族の家族にとつての場合と同じくらい重要な意味をもっていた。

だが、これらのバリエーションは、やはり同じ文化的伝統の内にあるものだった。さらに人類学者の紹介によつて、われわれはその他の家族形態の非常に多様な方を知るようになった。たとえば年長の世代のすべての女性が「お母さん」と考えられている非常に拡大されたハワイの家族から、一夫多妻や一妻多夫の取り決めの変化に富んだ形態まで。これらすべては、核家族の崩壊目の当たりにする準備だったといえる。離婚率は五〇パーセントになり、大多数の子どもが父親がい